「底が突き抜けた」時代の歩き方 105

コンテンツ解体の行方

コンテンツとは本来は、映画、テレビ番組、音楽、小説など流通する情報の中身のことであるが、最近ではネット関連でケーブルテレビ（ＣＡＴＶ）やパソコン通信で配信される情報の中身や、パソコンなどで処理されるソフトウエアの情報の中身を指す場合が多い。そのコンテンツ解体について、朝日新聞コラムニストの船橋洋一が『週刊朝日』（００．８．１８－２５）で紹介し、問題を投げかけている。

船橋氏によれば、コンテンツ解体はたとえば、オンラインで販売される旅行ガイドブックの項目ごとの切り売りというかたちですでに起こっている。フランスのガイドブックなら、パリやリヨンやニースとかに分けて「バラ売りする仕掛け」であり、一冊２０ドルが一部分３ドルで済むなら、消費者としては大変結構なことであろう。オンラインビジネスの強みが、「標的を絞り込み、顧客の好み本位に選り分けたコンテンツ」の供給にあるとすれば、旅行ガイドに続いて、料理本や各種のハウツーものからコンテンツ解体が進むのは当然の結果といえよう。大学の授業で使う「教科書、参考書の中で言及される文献、資料などをオンラインで呼べば、章ごとに取り出せるシステム」も開発され、コンテンツ解体はその分野まで及んでいる。

当の大学自身も、「コンテンツ解体の過程にある」ことが報告されている。「次々とキャンパスに来る学生に対する伝統的な授業以外にインターネットを使ったオフ・キャンパスのオンライン授業を急速に拡充し始め」た結果、「どういったコースを用意し、どういった資格を提供できるか、どのような名物教授を抱えているか、どの程度、丁寧に質問に答えてくれるか」といったオンライン授業の決め手を整理して、社会人学生を集めれば、「オフ・キャンパスでの収入は、大学にとっては今後期待できる大きな収入源」になる。スタンフォード大学のイー・スコラーは医療介護関係の資格を提供し、デューク大学は１９カ月で取得できるＭＢＡ（経営学修士）コースを売り出し、ワシントン・ポスト紙のインターネット大学では弁護士の資格まで与える。

オンラインバラ売りビジネスは大学の売れっ子教授にまで触手を伸ばしつつあるし、そうなると従来のキャンパスの概念では律しきれなくなってくる。そして、「音楽や芸術に携わるアーティスト、作家、ジャーナリストなどは、さまざまなマルチメディアの場に作品を提供する機会が生まれるだろう。無数の人々がインターネットを使って自分で仕事をするようになるだろう。事務や秘書といった仕事も、将来はデスクトップ出版者となり、ネット上での在庫管理マネジャーとなるだろう。アドバイザーやカウンセラーやコーチやトレーナーといった種類の人々が、それぞれの分野で数多く生まれてくる

だろう。そういう時代を迎えようとしているのに、規格化された標準知識の水準を競う全国共通コンテンツの試験など意味がなくなる」と言うのは、クリントン政権一期目の労働長官を務めたロバート・ライシュである。

船橋氏は、「未来学者のアルビン・トフラーが言うように、２１世紀のリテラシー（識字能力）とは『読み書きそろばん』能力ではなく、『学んでは、それを捨て、また学び直す』ことのできる能力のことである」なら、「大変なことだ」という。「なぜなら、それは、コンテンツを解体しては統合し、また解体していく永久運動にほかならないからだ。」もちろん、「読み書きそろばん」能力すら危うくなっている（日本での）現在、そんな「永久運動」を担える能力はどのようにして育成されるというのか。「コンテンツ解体屋ばかりが謳歌する世の中」、その「永久運動」を「吸収するはずのこちらのほうのコンテンツ、つまり常識、良識とか、歴史観とか、人生観とか、そういったことはどうなるのか」と船橋氏は問い、「コンテンツ統合屋のほうのビジネスモデル、いやヒューマンモデルはいつ登場するのか」と締め括っている。

船橋氏の筆致は余裕をもって感じられるが、私にはこのコンテンツ解体は、人間の精神世界の解体のより一層の加速化と捉えられるほど、重大事である。情報、知識の細分化、切り売りは現に進行中だし、人間存在の機能性への傾斜の凄まじさはもはや押し止めようがない。コンテンツ解体が「ハウツーもの」に限定されている間は、障害をほとんど感じることはないが、コンテンツ解体が「ハウツーもの」的な感覚を伴って、「ハウツーもの」以外の人間の無尽蔵な精神世界の未知の深奥にまで荒々しく、気軽に踏み込んでくるとするなら、その暴挙に対抗する術を我々は全く持ち合わせてはいない。漱石やドストエフスキーの小説のある部分が切り売りされて、読書、鑑賞されるというようなことが考えられるだろうか。

表現はどのような水準のものであっても、総体として取り扱われるべきであって、部分化されることは表現の死に等しい。文学作品も全く同じである。船橋氏によれば、「ジェームズ・ボールドウィンの『ネイティブ・サン』のある章だけを取り出そうと思えば、クレジットカードで１ドル７５セント払えばたちまちにしてダウンロードできる」らしい。これは従来のように、作品のどこかをコピーするということではなく、需要に合わせて文学作品を切り売りするオンラインシステムがすでに出来上がっているということを意味する。人間の臓器がパーツ化されて切り売りされていくぐらいだから、コンテンツ解体の加速も十分想像できるが、ただ臓器をいくつ組み合わせても一個の人間が生まれてこないように、切り売りされた精神世界はいくら寄せ集めても総体をかたちづくることはありえない、ということははっきりしている。

解体は解体であり、コンテンツ解体がコンテンツ統合に向かうことはない。エネルギーを膨大に必要とするような解体ではありえないから、解体は底なしであり、そこからもはや統合への限りなき意志が突き上がってくることは考えられない。「コンテンツ解体屋ばかりが謳歌する」ことはあっても、「コンテンツ統合屋のほうのビジネスモデル」

が登場する余地はまったくなくなっている、というのが本当のところではないか。オンラインバラ売りビジネスがコンテンツ解体の加速化の中から生まれていることを考えるなら、いま我々に真に求められているのはコンテンツ統合であって、コンテンツ解体ではない筈である。ゲーム作家の岡田斗司夫は、「作り手になるより消費者としてとことん楽しむほうを選ぶ」（『中央公論』００年９月号）若者の増加によって、海外で人気を博してきたマンガ・アニメ界のクリエイター不足を指摘しているが、その原因は、クリエイティブ精神の衰退を促進させていくコンテンツ解体の加速化に大きくかかわっていることは間違いない。　　２０００年9月１９日記